

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	觸體の記：文苑
Author(s)	中内，蝶蝶子
Citation	龍南會雜誌， 4 2： 3 1 - 3 2
Issue date	1895-12-26
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4753
Right	

行、適于義不顧人之是非、皆豪傑之士、信道而自知名者也、と曰ふもの、蓋、こゝに意ありし。

彼が自信や此くの如し。彼が本領果して如何なりしぞ。請ふ、余をして次の數章に於て之を語らしよ。
(未完)

文苑

髑髏の記

中内蝶蝶子

神無月のころ、ゆくりなくたち出て、そこはうとなく、人も通はぬあら野のうちをありきけるに、水田のうちに、弓もてたてる案山子の寒けなる、枯れ伏したる草むらに、すゝき尾花の折れながらにたてる、いづれともなく物あはれなり。猶そのなかをたどりゆくに、丸らかなる物の杖にふれける。いふなるものにかある、とよくみれば、こはいろにあさましき一つの髑髏にぞあるける。雨にあらはれ、風にさらされ、いくばくの月日をうへにけん。身の毛もよだつてうちぞしける。

抑も此髑髏はよ、如何なる人にうありけん。富めりし人か、貧しかりし人か、この泰平の御代にありて、何如なる罪ありてう人に殺されにし。跡にをさむる人もなきは、はたいかなる故ぞや。あはれ世に生ける間こそ、美醜貴賤のけぢめはあれ。魂魄ひとたび去れば、みなこの髑髏にぞありける。げにも、身の後に、こがねを残して、北斗をさふども、人のためにぞわづらはるべきと、昔の人の云ひける。知らず、今の世の人何の

波瀾起伏の處を觀るべし

一句忽爾題に歸し
人をして覺えさら
しむ佳

ために、か、利、に、走、り、つ、心、を、な、や、ま、す。人、の、身、の、う、へ、は、や、が、て、わ、が、身、の、上、と、思、へ、ば、
よ、そ、に、見、す、ぎ、ゆ、く、に、え、忍、び、ず。傍、へ、の、土、深、く、埋、め、て、ね、も、こ、ろ、に、回、向、す、ら、く、そ、も、そ
も、汝、は、何、處、の、人、の、は、て、に、し、て、い、か、なる、業、因、に、よ、り、て、今、は、う、く、あ、さ、ま、し、き、姿、と、な
り、ける、ぞ、や。わ、の、れ、汝、と、深、き、え、に、し、こ、そ、あ、ら、ぬ。情、に、し、の、び、さ、る、所、の、あ、れ、ば、吊、ひ、つ
る、な、り。汝、速、に、土、と、な、り、て、草、を、こ、や、し、も、て、佛、果、を、結、べ、よ。と、念、じ、た、へ、て、さ、て、勸、善、懲
惡、の、よ、か、た、り、に、も、し、つ、る、ま、を、い、さ、ま、か、書、さ、し、る、ま、つ、る、に、な、む。

稼堂陳人評

秋季修學旅行軍歌

黒本植

(一) 頃は霜月秋のくれ

晴れゆく峰のもみぢ葉を

いつか身に着る錦をど

思ひたつたの山風に

あさちの露を掃はせて

進めや進めすゝむ身の

覚えは徳の基なり

覚えは徳の基なり

人情風俗地理歴史

(二) 岩根松がね踏みならし

鶏なく月の宿出で、

磨けやみがけみがく身の

金石草木とりくの

學理の鏡に照せつゝ

銑を枕に見はなせば

智識は御世の光なり

智識は御世の光なり

銑を枕に見はなせば

(三) 旅より旅のなれ衣

身にまむ霜を重ねつゝ

銑を枕に見はなせば

南は臺灣北は露西亞

青山萬水目に満てり

銑へや銑へきたふ身の

武勇は國の護なり

武勇は國の護なり

銑へや銑へきたふ身の